

北海道然別湖の周辺にて大正時代の登山家・大島亮吉の足跡をたどる — 特に自然・植生景観に注目して —

丸山 まさみ¹⁾

Following in the footsteps of Ryokichi Ohshima, the climber of the Taisho Era,
around the Lake Shikaribetsu, Hokkaido
— special attention to nature and vegetation landscapes —

Masami MARUYAMA¹⁾

はじめに

大島亮吉（1899～1928）は大正時代から昭和初期に日本各地の山を歩き、多くの登攀記録、登山研究に関する著書や紀行、随筆を残した登山家である。彼は主に本州の山で活動したが、北海道にも2回訪れており、その紀行は『石狩岳より石狩川に沿ふて』、『北海道の夏の山』としてまとめられた。後者は2回目の来道時の記録であり、東大雪を歩いている。特に、然別湖の南にある西ヌブカウシヌプリに登った際の感動が大きかったため、その部分だけを『平原に聳ゆる山—西ヌブカウシヌプリ』として『北海道の夏の山』よりも先に発表した。大島によると、「平原に聳ゆる山」とは「ヌブカウシヌプリ」というアイヌ語の意味である（注1）。

紀行文の自然描写は、専門的な調査による報告書がない時代や場所に関して、過去の自然や植生景観を知る資料となりうるものである。実際に踏査・観察を行い資料を収集することによって、過去の景観や現在へ移り変わってきた様子を推測することができるかもしれない。植生景観については、具体的な群落名や植物名などで示されなければ、見る人が抱いた印象により作り出された言葉で語られることになるが、観察と資料を通して注

意深く読み取ることによって得られる情報も多い。何よりも、その過程を通して紀行文の著者が見た「その時の景観」が生き生きと浮かび上がって来れば、古い時代の資料を読み解きながら実際に踏査する楽しさは格別なものとなるだろう。

本報告では、『北海道の夏の山』の中から大島が然別湖周辺を歩いた部分を紹介して、現在の様子や過去の資料を参考に、特に自然および植生景観に注目しながら整理・検証する。

なお、大島らが歩いた東大雪の植物については、最近の文献では丹羽・久保田（1993）、丹羽（1994a, 1994b）、滝田ほか（1995）、丹羽ほか（2000）、丸山ほか（2004）、山崎ほか（2012）、丸山・山崎（2013）が参考になる。

注1：『北海道の地名』では、ヌブ・カ・ウシ・ヌプリ（nup・ka・ush・nupuri）は「野の・上に・いる・山」という意味である。

大島亮吉の略歴

大島亮吉は1899年（明治32年）9月に東京・芝で生まれた。慶応義塾大学では山岳会に入って精力的に山に登り、冬季もスキー登山を行うなど、四季を通じて山に親しんできた。1924年（大正13年）に大学を卒業したあとは外国語学校に進学、

1) 松籟庵 〒061-1136 北海道北広島市松葉町2-4-1 Shorai-an, 2-4-1 Matsuba-cho, Kitahiroshima, Hokkaido, 061-1136, Japan.

軍隊勤務などを経験したが、除隊後は再び山に登り続けた。1928年（昭和3年）3月、28歳の時、前穂高岳を登攀中に転落死した。

大島の来道

大島が北海道を訪れたのは1920年（大正9年）と1923年（大正12年）である。最初の来道（『石狩岳より石狩川に沿ふて』）では、松山温泉（現在の天人峡温泉）よりトムラウシ、石狩岳、ユニ石狩岳などを経て層雲別温泉（現在の層雲峡温泉）に下山した。

2度目の来道（『北海道の夏の山』）では東大雪に入った。ニペソツ山方面を目指して現在の鹿追町瓜幕から然別川、シイシカリベツ川を遡り、ウペペサンケの稜線に登ったが、予期せぬ事態に予定変更が続いて結局どこかのピークも踏まずに音更川へ下った。その後、支流のナイタイ川から山を越えてヤンベツ川に下り、然別湖に達した。さらに南下して西ヌブカウシヌプリに登頂後、再び瓜幕に戻った。

『北海道の夏の山』の行程

『北海道の夏の山』では、まえがき相当部分に続いて行程と紀行文が書かれている。大島が東大雪を歩いたのは1923年（大正12年）7月14～25日である。最初の計画では、然別川を遡ってウペペサンケの稜線から尾根伝いにニペソツ山、石狩岳まで歩き、音更川に下る予定であった。同行者は山仲間4人と山に慣れた人夫2人、売幕（瓜幕）で雇った若い人夫1人で、大島を入れて合計8人である。陸地測量部の5万分の1地形図（大正9年測図・大正10～11年発行）を持参していた。

以下に大島らの実際の行程を要約して示す。地名の表記は『北海道の夏の山』に従ったが、カッコ内には現在の地名・河川名および注釈を入れた。図1に大島本人が書いた踏査ルートの略図を、図2には現在の20万分の1地勢図にその踏査ルートを記入したものを示す。

7月14日

汽車で旭川方面から狩勝峠を越えて新得駅に到着した。道路をたどって屈足村経由で売幕（瓜幕）まで歩き、売幕駅通に宿泊。雨がひどかった。

7月15日

売幕を出発、然別川沿いに開墾道路を北上した。さらに、オソウシュ川との合流点からはシーシカリベツ川（注2、3）沿いの道をたどった。地形図上の「関造材事務所」の地点にある廃屋に宿泊。終日、小雨が降ったり晴れたりした。

7月16日

シーシカリベツ川を遡行し、然別温泉（現在の旧菅野温泉）に立ち寄った。ユーヤンベツ川（シイシカリベツ川：注3、4）との合流点から上流へ二つ目の二股の地点で露営。終日曇っていて時々小雨が降った。

7月17日

シーシカリベツ川（イシカリベツ川：注4）をさらに遡行し、ヤブの急斜面を登ってウペペサンケとニペソツから伸びる尾根上にある1646mピーク（現在1614m）との間の約1400mの鞍部に到着した。そこでニペソツ方面への尾根がハイマツとヤブばかりで残雪もないことを確認し、ホロカオトプケ（の本流。現在の幌加川：注5）に下り沢を遡ってニペソツだけに登頂するという計画に変更することにした。売幕で雇った人夫が体調を崩し、鞍部から真北に下ったわずかに水のある地点で露営。

7月18日

人夫の具合が悪化、一日停滞。終日快晴。

7月19日

ホロカオトプケ（の支流）を下り、本流との合流点にあるアイヌの古い小屋掛け跡に病気の人夫をおいて、本流を遡った。ニペソツから出る源流（注6）へと上がり、1160m付近の二股を左に行った地点のガンピ（カンバ）林で露営。源流を登るうちに雨、夜には大雨となった。

7月20日

食糧の関係でニペソツ行きを断念した。人夫を残した地点まで戻り、全員でホロカオトプケ（幌加川）の本流を下った。地形図上の箱状の滝のある地点を過ぎて幅広い積の砂州で露営。雨は降らないが霧が深かった。

7月21日

ホロカオトプケを下って音更川本流と合流する地点で、本流を下ってきたイワナ釣りに出会った。

一緒に本流にある関造材の伐木道を下ってヌカビラ（糠平）に到着した。ヌカビラを遡りヤンベツ（ヤンベツ川：注7）に下って然別沼（湖）に行く計画を立てていたが、イワナ釣りから内待川（ナイタイ川）を遡ってヤンベツに下りる道を教えてもらったのでそのまま音更川本流を下った。元小屋の清水澤駅通に宿泊。

7月22日

清水澤駅通より音更川沿いに開墾地を南下して奥上士幌を過ぎ、音更川本流を渡って内待川沿いの道を上った。本名造材事務所に宿泊。

7月23日

内待川沿いに遡上し、最初の二股を右、次の二股を左に遡上して分水嶺に到着した。そこから進路を西北に取って下り、ヤンベツ本流に合流して、ヤンベツを下って然別沼に到着した。河口にあるアイヌの魚釣り小屋に宿泊。

7月24日

然別沼の左岸（東岸）についていた道庁の測量用の切明道をたどって（南下）、沼が右（東）に入り込んだ岸辺の平らなところにあった道庁林務課の測量テントに到着した。そこから丸木舟で対岸（2の湾）の然別沼温泉に船を借りに行き、借りた船でトーマベツ（トウマベツ川、然別川：注8）入口に渡った。南へ向かう小道を登って東西ヌプカウシヌプリ間の見晴峠（白樺峠）に到着し、峠から西ヌプカウシヌプリに登頂、少し下って1230m（現在1205m）の頂上に登り、しばし十勝平野の展望を楽しんだ。南下して地形図上の小道まで下り、小道をたどって売幕駅通に戻り、宿泊。

7月25日

売幕から新得まで歩き、午後の汽車で北見方面へ向かった。

注2：然別川はオソウシュ川との合流点から上流でシーシカリベツ川（現在名シイシカリベツ川）となる。

注3：大島は然別川の上流からシーシカリベツ川とユーヤンベツ川という河川名を記しているが、当時の地形図ではそれぞれシーシカリベツ川とユーヤンベツ川として表記されている。

注4：当時の地形図では、シーシカリベツ川の上流部は然別温泉より少し下流の合流点から西がシーシカリベツ川、東がユーヤンベツ川と表記されている。しかし、最近の地形図では、西がイシカリベツ川、東がシイシカリベツ川とされ、ユーヤンベツ川という河川名は見当たらない。

注5：ホロカオトブケは当時の地形図上ではホロカ川で、現在は幌加川と表記されている。

注6：最近の地形図では、大島が遡った沢に幌加川と表記されている。

注7：当時の地形図にはヤンベツという河川名が表記されていない。

注8：トーマベツ川は昭和33年発行の地形図からトウマベツ川と表記され、最近の地形図では然別川とされている。

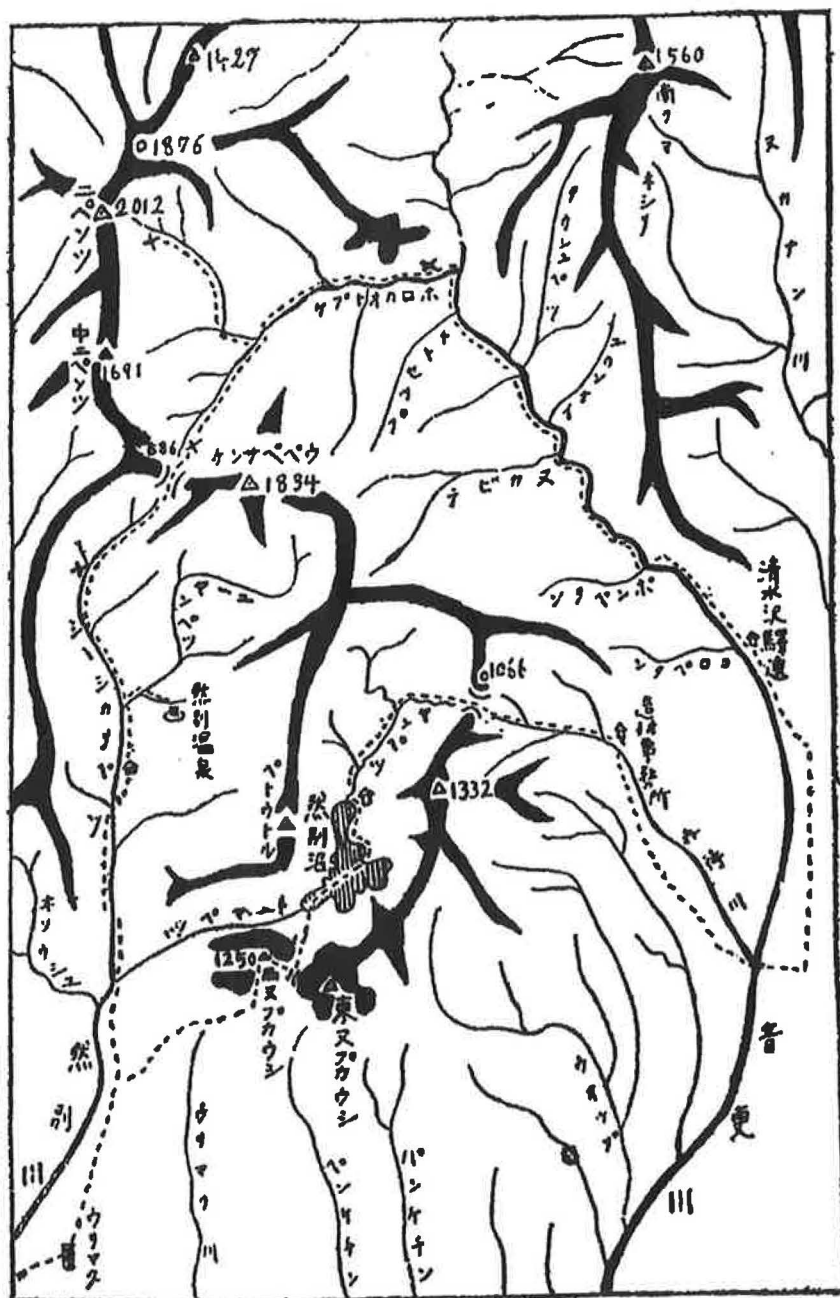
大島の足跡

ここからは大島らが然別湖周辺を歩いた部分、すなわち売幕～然別温泉と内待川～然別沼～売幕に対象を絞り、彼らの足跡をたどっていく。

大島らの踏査ルートを実際の5万分の1地形図『然別沼』（大正10年発行）に記入したものを図3に、現在の地形図『然別湖』（平成11年発行）に即して記入したものを図4に示す。このセクションでも地名・河川名の表記については、『北海道の夏の山』から引用・要約したところではそれに従い、現在名をカッコに入れて補足した。著者による現況記述の部分では現在名とした。著者は大島の踏査ルートをすべて歩き切ったわけではないが、現況の記述は基本的に実際の観察・調査に基づいている。

1. 売幕～然別温泉

大島らはまず、できたばかりの新しい道をたどって新得から売幕（瓜幕）まで歩いた。この道の両側は「全くの柏の林ばかり」であった。十勝平野の主たる原植生はカシワ林であり、1891年（明治24年）発行の『北海道殖民地撰定報文』にもこのあたりの高丘地（丘陵地）にはカシワが多いという記述がある。大島らが訪れてから90年もたった現在の鹿追町平野部は当然ながら広く農地化されてしまったが、カシワ林はあちこちに残存



然別山塊及び音更川上流概略図

路 道 行 一 一 一 一 一
所 個 營 野 X

図1. 大島亮吉の東大雪踏査ルート (1)

本人直筆.

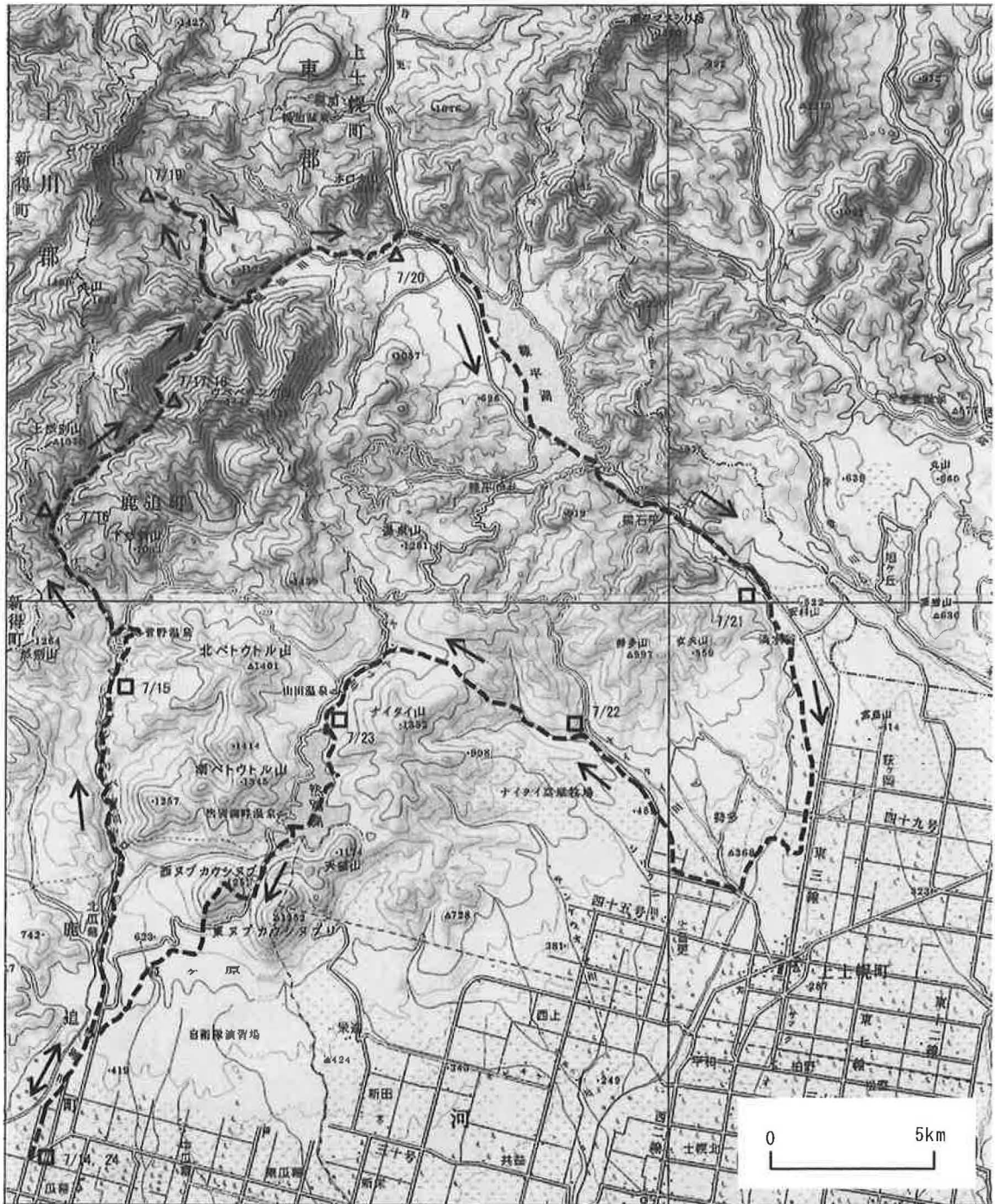


図2. 大島亮吉の東大雪踏査ルート (2)

20万分の1地勢図「帯広」, 「北見」使用。

□△: 宿泊場所を示す。□: 建物 (駅通など), △: 露営。記号の横は宿泊日。

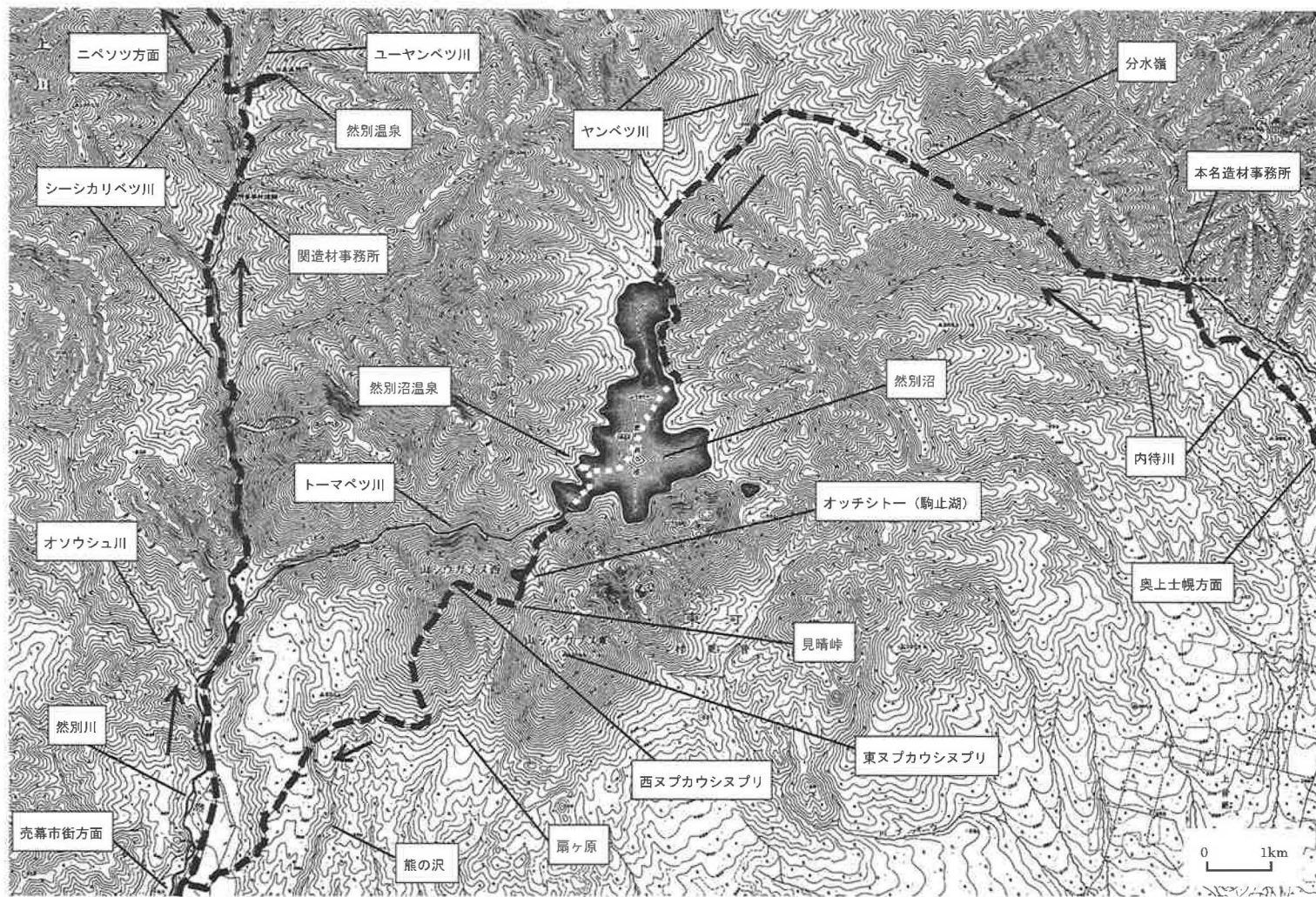


図3. 大島亮吉の然別湖周辺における踏査ルート (1)
5万分の1地形図「然別沼」(大正10年発行) 使用。

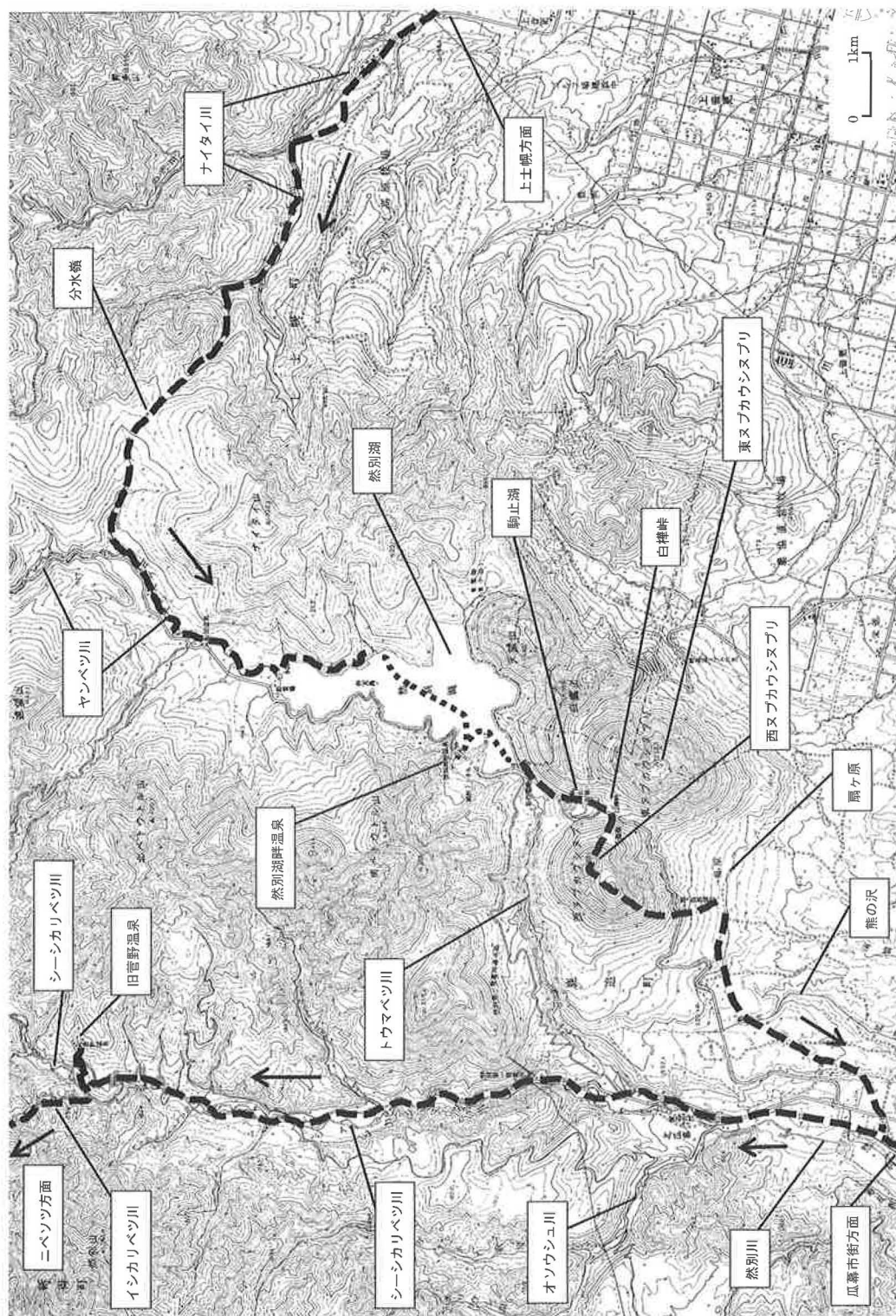


図4. 大島亮吉の然別湖周辺における踏査ルート(2)
5万分の1地形図「然別湖」(平成11年発行)使用。

している。彼らが宿泊した売幕駅逕は現在の瓜幕市街地よりも西の旧市街地にあった。

然別川はオソウシュ川との合流点を過ぎると「急に両側に山がせまって暗い深林の中に路がついていた」。現在、この道は道道1088号然別峡線となっている。先にも示したように、当時の地形図ではこの合流点から上流で然別川はシーシカリベツ川（シイシカリベツ川）となる。大島はシーシカリベツ川が全体として「感じが暗く、そして陰湿」で、「水は冷たく、流れの石は水苔で滑りやすく」、「川床の幅が狭い」としている。今の然別川ーシイシカリベツ川には急崖がそそり立つところもあり、河畔林や溪畔林、針葉樹林に覆われて大島の印象に相当するようなどころもあるが、砂防ダムのため川幅がかなり広く明るいところもある。

大島らが歩いた道は然別温泉に向かう道と伐木事業が終了した廃道とが入り混じった状態であり、この時に宿泊した関造材事務所も廃屋になってという記述から、すでにこのあたりの森林に人手が入っていたことがわかる。『上土幌町史』、『鹿追町七十年史』によると、1920年（大正9年）には王子製紙がこの付近の国有林で樹木の伐採を始めており、川を利用して伐採木を流送（川の流れを利用して大量の伐採木を短期間に移動させる運搬方法）していた。また、関木材は王子製紙の造材作業を請け負っていた。

大島は然別川・シーシカリベツ川で強く印象に残ったこととして然別温泉のことを挙げている。持ち主の老人夫婦と湯治に来ていたアイヌの親子が寂しそうな表情を見せつつも互いを思いやる様子が心に残ったという。然別温泉は現在の旧・菅野温泉の前身である（菅野温泉は2008年から閉鎖中であつたが売却され、再開予定である）。当時は1907年（明治40年）にこの温泉を発見した本郷兵吉が湯治宿を営んでいた。なお、当時の地形図では「然別温泉」と示されているが、『鹿追町七十年史』には「本郷温泉」とされている。

なお、然別温泉から先の、大島らがウペペサンケの稜線までたどったシーシカリベツ川（イシカリベツ川）沿いのルートは現在のウペペサンケ登山道・菅野温泉西コースである。途中までは林道がある（2012年は林道が崩壊して通行止めにな

っている）。

2. 内待川ーヤンベツ

大島らはニペソツ行きを断念したあと、ヌカピラ（糠平）で出会ったイワナ釣りに内待川（ナイタイ川）を遡上してヤンベツ（ヤンベツ川）に下る「イワナ釣りの路」を教えられ、計画を変更し内待川に向かった。現在、ナイタイ川の南にはナイタイ高原牧場があり、彼らがたどったナイタイ川沿いや支流の入口付近にも林道が通っている。この川沿いでは本名造材事務所に宿を借りているが、この付近もすでに業者による森林伐採が行われていたことがわかる。『上土幌町史』、『同補追』によると、本名造材は1919年（大正8年）からナイタイ国有林の払い下げを受けて立木伐採を始めており、伐採木を内待川で流送により運んでいた。また、このあたりは良材が豊富にあり、特にセン（ハリギリ）、カツラの良材があつたという。

「イワナ釣りの路」は「寂しく隠れた、たよりない、けれども愛すべき路だった」。それは「路という路ではなく、いつも川の出水では消え去（う）せ、深い草芒や緑叢には蔽いかくされ、倒れ木に阻まれてしまう、誰の眼にもそんな路があるとは気づかない路」であつた。大島は開墾者が「黙々と歩む」「生業の路」を踏みしめた。「誰が感慨なくしてこの愛すべき生業の路を慕って歩けよう」。

大島らが内待川を上りつめ、水がつきて約1000mの「針葉樹のなだらかな分水嶺」に達すると、そこは「静かに深林で厚く蔽われていた」。ここから進路を西北にとって、ゆるやかに流れるヤンベツの一流流を下り、ヤンベツ（ヤンベツ川）に出合った。

著者は2008年8月に「イワナ釣りの路」をたどるべく、ナイタイ川の支流を遡り、分水嶺を経てヤンベツ川に下った。沢沿いは傾斜があり、比較的大きな岩が積み重なっていて、長靴で遡上できる程度の水量であつた（写真1）。踏み跡は皆無だった。また、ところどころに樹木が倒れこんでいた。周辺は主に針葉樹林に覆われていたが大径木はなかった印象である。作業道跡にも遭遇し、過去に伐採が入った様子がうかがえた。水がつき

るあたりからは古い作業道跡にクマイザサがうっそうと茂り、先行者の行方をササをかき分ける音で探さなければいけないほどのところを通過した（写真2）。分水嶺付近まで来ると傾斜はなだらかになり、林床のクマイザサは密度・高さともにいくぶん低下した。ヤンベツ川支流の源流部ではアカエゾマツとトドマツが多くなり、林床は所々ミズゴケに覆われていた（写真3）。さらに下ると林内にはエゾマツも混じり、ササがしだいに増え、沢の水量も徐々に増えたが、それでもまだ長靴で十分下れる程度の状態であった（写真4）。ヤンベツ川との合流部が近くなると林道（内待林道）が現れて、ヤンベツ川に合流した（写真5）。

3. ヤンベツ川・然別沼

大島によるとヤンベツというアイヌ語の意味は「緩やかに流れる、岸のひらけた川」であるという。大島らが歩いた時、ヤンベツは「エゾマツの古雅な樹の香気のただよう深林」に囲まれ、「川の兩岸は丈の高い蔭の叢の（が）連り」、「そのあいだを幅広く、水浅く、ところどころ砂州や小さな礫をつくっては静かにうねり流れて」いた。「分流がいくつも生じていたので紛れやすかった」とも書いている。然別沼が近くなると、「その流れはゆるやかになって、澱んでいるのか流れているのかわからないほどになり、後もどりしているかのようになで思われるほど迂（うね）って」いた。「ヤンベツこそ北海道の山に特有のゆるやかにうねりくねって原始の臭のみちみちている深林や叢林のあいだを静かに流れている川だ」という。

著者はこれまでにヤンベツ川沿いをたびたび歩いてきた。内待林道付近から下流はケヤマハンノキやヤナギ類を主とする河畔林で、河畔林の背後には針葉樹林が広がっている。川の上空が開けてかなり明るいところも見受けられる（写真6）。とりわけ2000年代に入ってから短期間の大量降雨による増水で河畔林が河岸ごと流されてしまうほどの事態が何度も発生した。また、道道が川の近くを通るところも何か所があるため、車が通行していなくてもその方向からは人工物が存在する気配が感じられる。途中には鹿追町の養魚場もある。このため、今のヤンベツ川は、大島らの歩

いた区間に限っていうならば、「ゆるやかにうねりくねって原始の臭のみちみちている深林や叢林のあいだを静かに流れる川」という状態とは少し遠いようにも感じられる。

しかし、比較的安定した場所を見れば、大島が引用したヤンベツの意味が「緩やかに流れる、岸のひらけた川」であるという説にうなずける状態でもある。この説が事実であるならば、ヤンベツ川は樹林によって全体が密に覆われていたわけではなく、平時にはゆったりと流れ、河岸幅もそれほど狭くない、ところどころ適度に開けた川だったのではないだろうか。「深林や叢林」という言葉に鬱蒼とした森の様子を抱いてしまうが、大島が人気（ひとけ）のない奥地の森林の印象を語ったものでもあると解釈するならば、大島の頃にも開けて明るいところが適度にあったのかもしれない。

ヤンベツという短いアイヌ語に対して、「緩やかに流れる、岸のひらけた川」と意味がついているのは少し長すぎるようにも思われる。『北海道蝦夷語地名解』によると、ヤンベツ（ヤム・ペツ *yam・pet*）は「冷たい・川」の意とされている（注9）。「緩やかに〜」は、もしかするとヤンベツというアイヌ語の意味ではなく、然別沼上流のヤンベツという場所の様子をアイヌが語ったものであるということは考えられるだろうか。

ヤンベツから然別沼の岸边に出た大島の、然別沼に対する印象は芳しいものではなかった。「実に感じの暗い山湖」で、「私の知った北海道の山湖のうちではこれがいちばん陰気だ」、「寂しいそうして陰暗（おぐら）い然別沼の水光」とまで表現する。しかし、これは「熊の踏み荒した蔭の叢や、深い水溜りのように陰湿なところを分けてそこへ出たため」であり、「その沼は感じが陰気なのではない。それはその水の色と周（めぐ）りの山影と岸边の深林とのため」、「それに人のいないということのため」であることを認めている。また、河口の小屋での夜には、「暗い鬱蒼たる森のなかでは鼻がしきりとあの古びた寂びのある声でほう、ほう、と啼いて」おり、「それはまるで太古のような夜だった。それで一層陰鬱な気分が身に沁みただったろう」と述懐している。

今の然別湖では河口に立っても、遊覧船や然別湖の西岸の道路を走る車の音、北岸キャンプ場やカヌーなどを楽しむ人々などの姿や気配があれば暗い印象を抱くこともないと思う。しかし、静かな然別湖をながめる時には、深緑の針葉樹林に囲まれて穏やかな、それでもずっと吸い込まれそうな濃青緑の深みを見せる湖に、「寂しいそうして陰暗い（おぐらい）然別湖の水光」が感じられることがあるかもしれない（写真7）。

注9：『北海道の地名』では、小清水町・止別（やんべつ）の説明において、アイヌ語で「ヤム・ワッカ yam・wakka（冷たい・水）」とは言いが「ヤム・ペツ yam・pet（冷たい・川）」とは言わないため、「ヤンベツ（ヤムベツ）」という言葉の語源は「ヤ・ワ・アン・ペツ ya・wa・an・pet（内地の方・に・ある・川）」であるという説を紹介している。

4. 然別沼の東岸と然別沼温泉

大島らは河口の小屋で一泊したあと、然別沼の東岸につけられた道序の測量用の切明（作業道）をたどって南下した。この切明は「わずかに歩ける程度に」「深林の苔むした間」についていた。そして、測量用テントのある平らなところから丸木舟に乗って対岸の然別沼温泉に渡り、舟を借りてトーマベツ（トウマベツ川、然別川）入口に渡った。

著者は過去にヤンベツ川の河口から然別湖の東岸を南下したことがある。ここでは2009年の様子について記す。ヤンベツ川河口を左岸に渡ってからはひたすら針葉樹林の中を湖岸沿いに歩いた。道はなく、あったとしても獣道であり、全体的に湖に向かって急傾斜して歩きにくいところが多かった。針葉樹の構成はトドマツ、エゾマツを主とする林分、アカエゾマツが多くなる林分など多様であり、林床はスゲやコケに覆われたところ、低木類が密生しているところ、クマイザサが多いところなど様々であった（写真8, 9）。

丸木舟に乗った場所は本人直筆の図からも読み取れる通り現在の唐沢湾（弁天島より東の湾）である。東岸沿いの湖岸は急傾斜になっているとこ

ろが多いが、唐沢湾には「岸辺の平らな場所」という記述の通り、湖岸付近の傾斜がなだらかな場所がある。

対岸の然別沼温泉は2の湾にあった施設で、現在の然別湖畔温泉風水の前身である。大島の当時は清野正次により開設されてまだ間もないころであった。

5. トーマベツ入口から見晴峠

大島らはトーマベツ入口から「暗い深林」の中を、東西ヌプカウシヌプリ方面に向かう小道をたどった。この小道は白雲山の西の裾を通っていたが、駒止湖では東側を通っていた。トウマベツ川をまたぐ橋が建設されたのは昭和初期、車が通れる道路が開削されたのは1932年（昭和7年）であり、大島の頃はまだ人が歩ける程度の小道であった。現在、然別湖と駒止湖の北側との間は直線化され、幅も広く、上空が明るく開けている。かつて駒止湖の東側についていた小道は遊歩道になっており、現在の道路は駒止湖の西側を通っている。

大島は特に詳述していないが、かつてこの区間はかなり険しいところであったようだ。1912年（明治45年）にここを踏査した音更村の村医・有田喜代平の手記（『音更町史』に全文掲載）にはその様子が示されている。有田は当時の音更村長らとともにアイヌの案内で音更村落市街からウリマク（瓜幕）を経由し、東西ヌプカウシヌプリ間、オッチシトー（駒止湖）を通って然別沼に達した。オッチシトーは「明鏡の如き湖水」であり、「その景色絶佳なる四面は、古来人跡更になき峻険の山、幾百星霜を経たる古木の森々として茂り、下は千草の花かと疑ふ計りの老苔繁茂して、千種万別の色彩を放ち、満山恰も錦を敷きたる如し」、「幾多の老樹生え、その梢には悉く尺余の糸房の如き青苔（著者注：地衣類のサルオガセであろう）をたらし」、という様子であった。有田らは馬の進行が不可能と判断してオッチシトーに留め置き、「勇を鼓して峻険險路を跋涉し、或は岩石に倚り、或は樹枝又は蔓を握りて」然別沼に向かうが、「下は千尋の断崖、トウマベツ川の流勢水煙濛々として飛瀉奔瀨、巖峽を劈（つんざ）き」、「山は益々陰悪を加へ、トド松、エゾ松、温古松（著者注：

オンコ、イチイ)の老樹森々として天を覆」って
いた森の中を歩いて行った。有田の手記は臨場感
あふれる名文である。

おそらく、現在の駒止湖遊歩道や白雲山登山口
付近の旧道が、当時の樹冠に覆われた森の雰囲気
を多少なりとも残しているかもしれない。『鹿追
町史』(p.750)には昭和初期の道路開削中の写
真が掲載されている。険しい森を切り開いている
様子がうかがえるもので、著者はこの写真が白雲
山登山口より旧道を少し南に行った位置から然別
湖方面に向かって撮影されたものであると推測し
ている。ただし、駒止湖遊歩道の北側部分では、
2006年10月に低気圧によって大規模な風倒木被
害が発生し、かなり開けてしまった(丸山・丸山
2011)。

大島らが東西ヌプカウシヌプリ間の「見晴峠」
に到着すると、そこは「広い高原のような草原」
になっていた。現在は白樺峠であり、鞍部は概し
てクマイザサが密生しダケカンバや針葉樹が疎性
する草原状になっている。植物の構成種は見た目
ほど単調ではない。

6. 西ヌプカウシヌプリ

大島の西ヌプカウシヌプリ登頂部分の記述は読
み解くのに注意が必要である。

まず、大島らが十勝平野を展望し、しばし滞在
した場所について注目する。行程の記述では、彼
らは「峠の上から直ちに西ヌプカウシヌプリの頂
上へ登った」。そして、少し下って1230mピーク
(現在の1205mピーク。以下、南西ピーク)の
上から十勝平野を眺めたとして、2つのピークを
区別している。ところが、後半の紀行部分では西
ヌプカウシヌプリの頂上から展望したかのように
書かれている。「峠のうえから」「草の短い斜面
を」登ってたどり着いた「西ヌプカウシヌプリは
全山殆んど草山で、その高さはわずかに一二五六
米突ではあったけれど、平原よりは千米突近くも
高まっていて、その平原の展望は私のまだその比
をみないほど広く、そうして大きなものだった」
のである。大島はここではるか遠くまで見渡せる
十勝平野の展望を楽しみながらも、見下ろした先
に住む売幕の開墾者たちの生活を憂い、ここまで

の厳しかった行程を振り返り、感慨をおぼえた。
大展望に感動し思索を巡らせたことを伝えるべく、
紀行部分では西ヌプカウシヌプリも南西ピークも
同一山体として特に区別せずに、このような記述
をしたのであろうか。

現在、西ヌプカウシヌプリ頂上(1251m)か
らは樹林に遮られて十勝平野をながめることはで
きない。南西ピークからは天気の良い日であれば
十勝平野の向こうに太平洋まで見えることがある
(写真10)。大島の紀行部分にも「前面は遠く広
潤として海の低みまでも遮るものなく打ちひらい
ている十勝平野のその宏やかな大景」という記述
があり、彼らも海まで見通すことができたようだ。

次に、植生に関する記述に注目する。大島の行
程には峠から西ヌプカウシヌプリにかけての植生
の記述がなく、西ヌプカウシヌプリから南西ピー
クへは「円い草原の尾根を少し下って」到着して
いる。一方、紀行部分では、峠から見上げた東西
ヌプカウシヌプリが「草山」であり、西ヌプカウ
シヌプリの頂上へは「草の短い斜面」を登り、一
歩ごとに視野が開けていったと書かれている。そ
して、「平らな頂の草原の上」に着き、「西ヌプ
カウシヌプリは全山ほとんど草山」であったとし
ている。

現在、西ヌプカウシヌプリの頂上付近は針葉樹
やダケカンバ、カエデ類に覆われており、南西ピー
クにはイネ科草本が優占する草原状のところ
に10m以下のダケカンバや針葉樹がパッチ状に生
育している(写真11)。白樺峠から西ヌプカウシ
ヌプリに向かう登山道はない。また、峠から見る
山腹はダケカンバと針葉樹に覆われており、エゾ
ムラサキツツジなどの低木類や倒木も多い。岩塊
の上に森林が成立していることもあり、無雪期に登
り上がるのには困難が予想される。西ヌプカウシ
ヌプリから南東に伸びる尾根の裾付近より山腹の
森林にミズナラが目につきはじめる。この尾根は
峠の最高点から登りあげるルートより傾斜が緩く、
積雪期にはここから登る人もいるので、「峠の上
から直ちに西ヌプカウシヌプリの頂上へ登った」
という記述の「峠の上」の範囲を広くとらえるな
らば、大島らはこのルートから登ったという可能
性も考えられる。

このように、大島らの踏査から90年が経過した今、「全山殆ど草山」状態だった西ヌブカウシヌプリの山頂や峠側（東側）斜面は、南西ピーク以外はかなり森林化したということになる（写真12）。東西ヌブカウシヌプリは後述するようにたびたび山火事に見舞われてきたことを考えると、彼らが訪れた頃に草山の状態であったことはありうることである。現在の南西ピークは山火事を経験して森林化の途上にある景観であろう。

西ヌブカウシヌプリ頂上直下の南西向き斜面には広い岩塊地がある（写真13）。このあたりは現在、風穴や永久凍土が存在することで知られている。現在の登山道は西ヌブカウシヌプリ頂上と南西ピークとの間をほぼ直線的に結んでつけられており、この岩塊地を通過する。もし、大島らが現在の西ヌブカウシヌプリ頂上と同じ位置までたどり着いたならば、そこから南西ピークに向かう途中で岩塊地を通ったと考えるのが自然だと思われるが、そのようなところを通ったということはどこにも書かれていない。また、この岩塊地が90年前は草原であったということはないだろう。大島は西ヌブカウシヌプリから「円い草原の尾根を少し下って」南西ピークに達したと書いているため、当時は岩塊地より東側が草原になっており、そこを歩いたとも考えられる。あるいは、岩塊地は歩きにくいと判断して回避したのだろうか。先に指摘した展望位置に関する記述の混合のこともあり、西ヌブカウシヌプリ南西ピーク付近の植生がどのようなものであったのか興味深いところである。いずれこのルート全体を詳しく検証してみたい。

「草原」、「草山」という言葉が示す状態は、果たしてまったくの草本群落なのだろうか、それとも低木類も混じった植物高の低い植物群落だろうか。高木類はまったくなかったのだろうか。細かく見れば若干気になるところだが、少なくとも頭上は林冠で覆われるほどの、あるいは枝葉で視界が遮られるほどの森林ではなかったことはいえるだろう。

東西ヌブカウシヌプリでは、開拓初期より開墾地への火入れが延焼するなどしてたびたび山火事が発生していた。『鹿追町七十年史』、『上士幌町史』には戦後の記録が掲載されている：1947

年（昭和22年）5月、1950年（昭和25年）4月、1959年（昭和34年）5月、1964年（昭和39年）5月、1968年（昭和43年）5月。とりわけ、1947年（昭和22年）5月の山火事は大規模なもので、東ヌブカウシヌプリ山麓で発生した火が白雲山、天望山方面に広がり、ナイタイ川の近くの沢まで達して、雨によって鎮火するまで約1週間かかったという。国土地理院が公表している1947年10月米軍撮影の空中写真でこの付近が広く焼き尽くされたような様子を見ることが出来る（<http://archive.gsi.go.jp/airphoto/>、2013年3月5日確認）。1968年（昭和43年）以降は大きな山火事が発生していないとのことである。また、延焼を防ぐために防火線として植生が刈り取られたこともある。このように、東西ヌブカウシヌプリや白雲山、天望山の南面は度重なる山火事を経験しており、かつての植生景観や今後の推移を考える際には考慮すべきことである。

7. 西ヌブカウシヌプリ 売幕

西ヌブカウシヌプリの南西ピークにしばしの滞在の後、大島らは「草地の斜面を地形図上の小径（こみち）まで一直線にかけ下りた」。現在の西ヌブカウシヌプリ登山道は南西ピークからまっすぐ扇ヶ原に向かってつけられているが、彼らはおそらくこれに近いルートを進んだと思われる。小径は「名もないような寂しい原野の野花や夏草の丈高く生い茂ったなかを、はっきりと踏めるだけに気持ちよくゆるやかな紆曲をもってつづいていた」。彼らは夕暮れの中を気持ちよく歌いながら、原野を通る小径をたどって売幕に戻った。売幕方面から扇ヶ原まで道路が開削されたのは1924年（大正13年）であるが、大島らが通った時はまだ工事が始まっていない小道状態だったのかもしれない。

著者が所蔵している戦前の絵はがきには、かつて熊の沢の西にあった小室綿羊牧場（1926年（大正15年）開設）から扇ヶ原方向を写したものがあり、西ヌブカウシヌプリの南斜面の様子をおぼろげながら読み取ることができる（写真14）。同梱されていた他の絵はがきには1931年（昭和6年）に完成した然別温泉ホテル光風館が写っており、

これらが同時期に撮影されたとするならば、大島らがこのあたりを歩いてから少なくとも8年後の様子が写っていることになる。道から上のところどころには広葉樹林（樹冠の感じや現状から推測するとミズナラだろうか）があり、さらに上部も違う種類の広葉樹林（同じくダケカンバ）がうっすら見える。樹林のない草地は現況から推測すればおそらくクマイザサやススキなどであろう。道から下にも草地が広がっている。写真左手から手前にかけての広葉樹林はおそらく熊の沢であろう。大島らが駆け降りたのが「草地の斜面」だったということは、山の上部から小径までのルートにはちょうど樹林がなかったか、まだ樹高が低く草本が優占した状態だったのかもしれない。小径に当たってから先の様子はまさしくこの絵はがきのような草地状だったと思われる。

現在、西ヌプカウシヌプリの南斜面は上部がダケカンバ林である。中腹ではミズナラが多くなるところもある。現在の道路はかつての道よりも上を通っているが、旧道も埋もれながらまだ残っており（写真15）、現道および旧道沿いにはミズナラやダケカンバなどからなる広葉樹林が広がる（写真16）。

売幕に向かう道の途中で大島は自らが歩いてきた方向へ振り返り、東西ヌプカウシヌプリが同じような大きさと高さの円い頂を並べて丘の上に立つ姿を見て、「十勝の平原から然別の奥深い山塊へはいるには、是非ともくらねばならない大地の門」と表現した。今でも瓜幕市街の北はずれに立つと、目の前に広がるのが草原ではなく畑であるという点では異なるが、平原にそびえ立つ東西ヌプカウシヌプリの姿をながめることができる（写真17）。

おわりに

大島の東大雪の旅の前半は総じて天候が悪く、しかもまったく道がない奥地への山行であった。しかし、後半には天候に関する記述がなく、少なくとも雨は降らなかったと考えられる。そして、最後は快晴の空のもとで締めくくられた。天候の好転が旅の最後の感動を一層大きいものにしたと想像するのは難くないだろう。

大島亮吉は山岳の頂上を目指した登山家であると同時に、低山を歩きまわり、峠を越えるような「さまよい歩き」も好んでいた。彼は登攀記録や登山技術の考察ばかりでなく、「さまよい歩き」で思索を楽しむような紀行も残している。ここに紹介した東大雪の旅では、ニペソツ山や石狩岳への縦走を目指していたものの、結局登頂を果たしたのは西ヌプカウシヌプリのみであった。それにもかかわらず、彼はできたばかりの開拓道路を歩きながら、あるいは高いところに立って耕されつつある広野と開拓村をながめながら、開拓者たちの苦労に思いを寄せた。山奥で暮らす人々の寂しさを感じとり、寄り添ってあげられなかったことを悔やんだ。深い森の中や、急峻な、あるいはゆるやかな沢を歩いて自然をひたすら感じつつ、踏みつけただけの、寂びれて隠れそうな開拓者たちの「生業の道」を慕い愛しんで歩いた。アイヌ語地名の美しさと素直さに感動した。ときには疲労感から抱いたのであろう悪印象まで正直に吐露するが、そんなこともひっくるめて彼は北海道の山の中の「さまよい歩き」を楽しんだ。

「北海道の夏の山で私のいいとおもっている点は、まずその原始の匂いの多分にするような深い森林のなかをさまよい歩くことと、北海道の夏の山では常に自然の路であるところの川歩きそれもゆるやかにうねっては流れている浅い沢をピチャピチャと徒渉し歩くことである。それから荒々しい未開の自然のなかへ一歩一歩とはいってゆく人間生活の努力と自然との密接な暗示の働きがまざまざと親しく眺められるようなその開墾地特有な風景である。そしてなお、もうひとつには山へはいると殆ど人には会わないことである。人の歩いた跡さえも稀れなことである。そんな点で私はこの山歩きにそんなに失望はしなかったのである。」

「それからもうひとつ好きなのは、アイヌの山にいるやつの生活をみることに、アイヌ語の美しい山の名や川の名だ。」

「旅では歩くことが歩くことを楽しませるのだ。」

大島亮吉が東大雪を歩いてから今年で90年になる。彼が残した著書により、私たちは東大雪のかつての姿、社会情勢の一端、人々の暮らしを知ることができる。大島が残した踏査や見聞の記録、そこに暮らす人々への思い、道への愛着の記録は、古き時代の自然を伝える資料でありながら、静かに心を動かして何かを響かせてくれる。これからも資料の発掘・検証を続けるとともに、「今」を記録していきたいと思う。

謝 辞

中川千夏氏、丸山立一氏にはナイタイ越えおよび然別湖東岸踏査に同行していただき、原稿の校閲もしていただきました。阿久澤小夜里氏には写真を提供していただきました。ひがし大雪博物館の須田 修氏・乙幡康之氏には本稿の掲載にあたりお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 北海道庁, 1891. 北海道殖民地撰定報文。
 上士幌町史編さん委員会 (編), 1970. 上士幌町史。上士幌町役場。
 上士幌町史編さん委員会 (編), 1992. 上士幌町史 補追版。上士幌町役場。
 丸山まさみ・丸山立一, 2011. 大雪山国立公園・然別湖において生じた自然攪乱の記録—2006年10月の低気圧による南西部地域での風倒木被害—。ひがし大雪博物館研究報告 33: 9-16。
 丸山まさみ・山崎真実, 2013. 北海道大雪山国立公園, 然別湖の植物。V. 然別湖の水生植物相—2012年の状況と新たな確認種, および聞き取り調査による過去の分布について。ひがし大雪博物館研究報告 35: 1-7
 丸山まさみ・丸山立一・紺野康夫, 2004. 北海道大雪山国立公園, 然別湖の植物。I. 然別湖植物目録 (第1版)。ひがし大雪博物館研究報告 26: 1-22。
 永田方正, 1984. 北海道蝦夷語地名解 復刻版。草風館。
 丹羽真一, 1994a. 十勝地方北部, 白樺峠周辺の草原群集の多様性。ひがし大雪博物館研究報告, 16: 61-69。
 丹羽真一, 1994b. 白樺峠におけるショウジョウバカマ個体群の開花特性と開花時期に受ける凍霜害 (予報)。ひがし大雪博物館研究報告, 16: 77-80。
 丹羽真一・久保田康裕, 1993. 十勝地方北部, 白樺峠周辺の草原群集の開花フェノロジー。ひがし大雪博物館研究報告, 15: 89-95。
 丹羽真一・渡辺 修・川辺百樹・辻本涼子, 2000. 上士幌町維管束植物目録補遺。ひがし大雪博物館研究報告, 22: 69-71。
 大島亮吉, 1969. 大島亮吉全集1 紀行。本郷常幸・安川茂雄 (編)。あかね書房。
 大島亮吉, 2005. 山—紀行と随想。大森久雄 (編)。平凡社。
 音更町史編さん委員会 (編), 1980. 音更町史。音更町。
 鹿追町史編纂委員会 (編), 1973. 鹿追町史。鹿追町役場。
 鹿追町史編纂委員会 (編), 1994. 鹿追町七十年史。鹿追町役場。
 清水敏一, 2004. 大雪山の父・小泉秀雄—山と植物ひと筋に生き抜いた生涯。北海道出版企画センター。
 滝田謙譲・川辺百樹・辻本涼子・牧田英男・丸山まさみ, 1996. 上士幌町維管束植物目録。ひがし大雪博物館研究報告 18: 1-59。
 山田秀三, 1984. 北海道の地名。北海道新聞社。
 山崎真実・丸山まさみ・持田 誠, 2012. 北海道大雪山国立公園, 然別湖の植物。IV. 然別湖および東雲湖の水生植物相。ひがし大雪博物館研究報告 34: 19-26。

Summary

Ryokichi Ohshima was a renowned climber from the Taisho Era into the early Showa period. I followed his footsteps in East Taisetsu Mountains, Hokkaido, especially around the Lake Shikaribetsu, focusing on nature and vegetation landscapes through his travel writing, other literatures and actual exploration.

He visited with his climbing partners and porters in the summer of 1923. They initially had planned to traverse mountains, but they could climb only Mt. Nishi-Nupukaushinupuri due to unforeseen circumstances. Nevertheless, he enjoyed walking in forests and rivers, because he loved not only climbing but also wandering like this travel. Mt. Nishi-Nupukaushinupuri had been burned frequently from pioneer days, at the time of their visit, but fire has not occurred in the past 40 years. Ohshima represented this as a glassland mountain, but now is covered by the woods widely. It seemed that the vegetation landscape here most changed compared with other areas they walked.



写真1. ナイタイ川支流 (1).
2008年8月撮影.



写真2. ナイタイ川支流 (2).
2008年8月撮影.



写真3. ヤンベツ川支流の源流部.
2008年8月撮影.



写真4. ヤンベツ川支流.
2008年8月撮影.



写真5. ヤンベツ川と支流の合流点付近.
2008年8月撮影.



写真6. ヤンベツ川中流.
2007年6月撮影.



写真7. 然別湖。
北岸から、2012年8月撮影。



写真8. 然別湖東岸 (1)。
2009年8月撮影。



写真9. 然別湖東岸 (2)。
2009年8月撮影。



写真10. 西ヌブカウシヌブリの南西ピークから十勝平野の
展望。
2010年9月撮影。



写真11. 西ヌブカウシヌブリの南西ピーク。
奥は東ヌブカウシヌブリ。阿久澤小夜里氏提供。
2010年9月撮影。



写真12. 東ヌブカウシヌブリ登山道の途中から見た西ヌブカ
ウシヌブリ。
右は本峰、左は南西ピーク。2012年6月撮影。



写真13. 西ヌブカウシヌブリ南の岩塊地。
2010年9月撮影。



写真14. 戦前の絵はがきに写る東西ヌブカウシヌブリ。
2010年9月撮影。



写真15. 西ヌブカウシヌブリ中腹の旧道。
2012年10月撮影。



写真16. 西ヌブカウシヌブリ中腹の旧道付近のミズナラ林。
2010年9月撮影。



写真17. 瓜幕市街の北から見た東西ヌブカウシヌブリ。
2012年10月撮影。